
警視正、野田剛三の事件簿より 真実 下之巻 選ばれし者

一二三四

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

警視正、野田剛三の事件簿より 真実 下之巻 選ばれし者

【Nコード】

N6626Z

【作者名】

一二三四

【あらすじ】

或る夏の日、三件の凶悪犯罪が起こった。

一件目の犯人は、早朝の通勤電車の中で、拳銃を使って若いサラリーマンを射殺した後、無差別に発砲し多数の死者を出したが、自身もコメカミを打ち抜く。

二件目は、鉈を使った犯行で大学生の男と女子高生が犠牲となるが、目撃者の証言によると、鉈で屠られたと誰もが思った白髪の老

爺は突然消え、犯人は謎の死を遂げた。

三件目は未遂に終わったが犯人は車で逃走、なぜか狙われた女性も姿をくらましてしまう。

三件の事件にはなんの関連性もなく、変質者による犯行として片づけられようとしたが、そのことに野田剛三が疑念を抱く。

或る晩、殺されたはずの安堂が野田の夢枕に立ち、倭国？再興のために力を借りたいと迫る。

その後、行方知れずの兄優一と名乗る白髪の老爺が表れ、日本に未曾有の危機？が迫っていると告げる。

物語もいよいよ佳境、シリーズ第四弾『選ばれし者』、お楽しみください。

尚、この物語は他のサイトにも掲載中です。

第一章 血塗られた金曜日

第一章 血塗られた金曜日

1

二〇〇九年八月七日、不快指数は朝から鰻のぼり、通勤客の足は重い。

そんな気だるさを吹き飛ばすような残虐な事件が、横須賀線の車内で起こった。

保土ヶ谷駅を定刻の六時五分に発車、次の横浜駅に着くか着かないかの刻限である。

どこから乗ったか、まだ空席の目立つ車内で若い男が新聞を読み耽っていた。

夏らしい軽やかな紺の背広に爽やかなブルーのネクタイ、立居振舞にも崩れはない。一流企業のサラリーマンだろう。

保土ヶ谷駅から乗車したと思しき男が、空席に目もくれず、ゆっくりと若い男に近づいて行った。

「……、ん？」

前に立った男の影が新聞に掛かったか、若い男が顔をあげた。と、「あつ、えッ!？」

男が拳銃を構えている。

・モデルガン……?・・・

一瞬、冗談かと思った。

しかし、黒ずんだ男の表情に精気はなく、その眼には冷酷な光りを宿している。

「な、なんだ。あッ! や、止めるオーッ!」
と叫んで手を突き出した。

それが、若い男の最後の言葉になった。

『ズガアーン！ ガッ』

一発目は突き出した掌を打ち抜き、右目に入って、後ろの窓ガラスに紅い糸で蜘蛛の巣を張った。

『ズガアーン！ ガッ』

二発目は、男の顔が仰け反ったので喉仏を砕いた。

『ズガアーン！ ガッ』

三発目は、反動で突っ伏した男の脳天を打ち抜いていた。

一瞬の間を置いて、

「キヤーツ！ ギヤーツ！ ウワアーツ！」

と絶叫をあげ、乗客たちは逃げ惑う。

中には腰が抜け、床に尻餅を着いてガクガクと震えている者もいる。

2

事件が起こったのは最後尾の車両だったので、車掌がすぐに異常を察知し、列車を横浜駅のすこし手前で急停車させた。

「あんなところで止まった？」

「故障かな……？」

ドアが開くと、乗客は先を争い線路に飛び降りた。

「あれ、乗客が降りだしたぞ」

「なんで降りるんだ？」

「線路を歩いている。危ないな」

横浜駅のホームでは、列車を待っている人々が怪訝な表情で、なにが起きたかと思入っている。

すると……、

拳銃を持った背の高い痩身の男が飛び降りた。

「あつ、あつ、け、拳銃……」

「えっ、なに、嘘!？」

駅のホームからだど状況の確認が出来ないようだ。

「ウワァーッ！」

と、悲鳴があがり、降りた乗客が蜘蛛の子を散らすように逃げ惑う。

逃げ惑う乗客に向って、男は二度引き金を絞った。

『ズガァーン！ズガァーン！』

中年男と女子高生がもんどり打って倒れる。

線路に血が飛び散った。

「ああつ、ほんとに拳銃だ」

「警察だァーッ！警察を呼べェーッ！」

横浜駅のホームの乗客たちも驚き騒ぎだした。

「こ、こつちへ来るぞ。逃げるオーッ！」

と誰かが叫ぶと、ホームもパニックに陥った。

慌てて線路から転げ落ちる者もいる。

……とそのとき、

『ピィーッ！ピィーッ！』

と汽笛がけたたましく叫び、

『キィーッ！ギギギギーッ……』

と急ブレーキの金属音が耳を劈いた。

線路を逃げ惑う人々に向って、東京駅発の下り快速列車が迫る。

それに気づいた人々が、思わず両手で顔を覆った。

「ギァーッ！ウギァーッ！」

という断末魔の絶叫、続いて、

『グシャッ、ビチャッ……』

という異様な音とともに血煙が舞いあがり、肉片がビタビタと人々に襲い掛かる。

辺りは阿鼻叫喚の巷と化した。

しかし男は、地獄絵図を見てニヤリと笑い、銃口を自らのコメカミ当てた。

そして、一瞬の間を置いて、

『ガァーン……』

銃声が轟いた。

『ヒュー…、ヒュー…』

と、不気味な虎落笛もがりぶえを発し、鮮血がパツと飛び散り、男が朽木倒しに後ろへ倒れた。

啞然と見詰める人々には声もない。

一瞬の静寂の後、

『ギヤーツ！ ウワアーツ！』

という絶叫に続いて、絶望に泣き叫ぶ声があちらこちらから起った。

『ピーーツ！ ピーツ！』

という鋭い笛の音とともに、ドカドカと駅員たちが駆けて来る。

パトカーと救急車のサイレン音が、徐々に大きくなって来る。

その音に安心したのか、或いは恐怖心からか、腰を抜かし座り込んで者もいる。

中には失禁している者をいるようだ。

無数に転がる礫死体、千切れて飛んだ腕、脚、目を見開いたままの頭には首から下がらない。

夥しい量の血と肉片、そこはまさに戦場だった。

3

ほぼ同時刻に、新宿駅を発車した外回りの山手線の車内で、漫画に読み耽る大学生風の男の前に、バツクバツクを手にした痩身の男が立った。

しかし、漫画に夢中の男は気にもかけない。

痩身の男はバツクの中を探り、新聞紙に包んだなにやらを取り出した。

その音が気になったのか、大学生風の男はチラツと顔をあげた。

ガサゴソと新聞紙を開くと、中から研ぎ澄まされた鉈のようなものが出てきた。

「ん……？」

すぐに視線を漫画に戻したが、

「えッ!？」

と驚きの声を発し、男の顔をマジマジと見た。

しかし次の瞬間、男の顔が映ったその眼に真紅のカーテン^{マネ}が引かれた。

振り上げられた鉈は、グシャと不気味な音を発し、頭頂部から鼻の辺りまで断ち割っていた。

『ガッ! ガッ! ガッ! ガッ!』

と、何度も何度も鉈を打ち下ろす。

『ブワァーッ!』

と血が飛び、ビシャビシャと辺りを濡らす。

肉を裂き、骨を絶つ鈍い音が、乗客を恐怖の底へと誘った。

「ウギヤァーッ!」

と叫んで、車内の一角の乗客が逃げ惑う。

「なんだ？」

突然の絶叫に、乗客の視線が一点へ集中する。

見るも無残な姿だった。頭蓋は二つに叩き割られ、首から上はほとんど形を成していない。

頭から噴出した血は、座席から床にビチャビチャと音を立てて流れ落ちていく。

辺りは血の海、血の池地獄と化していた。

『ジリジリジリ……』

と激しくベルが鳴り響き、列車は急停車した。誰かが非常停止ボタンを押したのだろう。

その拍子に男はよろけ、血で手が滑ったのか、鉈を投げ出した。

4

しかし男は動ぜず、落ち着いて鉈を拾いあげると、首を捻って、

男の行動を冷静に見詰めている女子高校生に視線を移し、

「うつ…」

と漏らして、鉈を横に薙いだ。

『ガッツ！』

と骨を断つ音がして、ゴロンと首が転げ落ちた。

腰が抜けて動けないOLの目の前に、眼を見開いた血塗れの首が立った。

「ギヤーツ！」

と叫んで、OLは気を失った。

男は首からなにやら抜き取ると、車内灯に翳し、チツと小さく舌打ちをして、腕時計に目をやった。

前の車両から、白髪の老爺がゆったりとした足取りで近づいてくる。

それを右目の端で捉えた男は、

「チツ！」

と、もう一度、今度は大きく舌打ちをした。

そしてなにかを決したように、

「ウワアアアーツ！」

と叫び声をあげ、物凄い形相で白髪の老爺に向っていった。

しかし老爺は、まったく怯まない。

「キヤーツ！」

と、悲鳴があがった。

血塗れの鉈が、唸りを発して白髪の頭に振り下ろされたが、鉈は鉄製の床に、ガシツとめり込んだ。

「糞ツ！」

とひと言申いて、男はもんどりを打って倒れた。

乗客たちが閉じた眼を恐る恐る開けると、床に男が横たわっている。

男はピクリとも動かない。

遠巻きにして見ていた乗客の中の一人が、おっかなびっくり男に

近づいて行った。

そして顔を覗き込み、

「し、死んでいる……」

と、ポツリと呟いた。

乗客たちの輪が縮まってくる。

男は白目を剥いて、口からはブクブクと蟹のような泡を吹いていた。

顔色はどす黒く斑に変色、死人特有の顔だ。

新宿駅と代々木駅の中間に停車したので、救援隊はなかなかやって来ない。

たくさんの乗客が線路を歩いて、それぞれ思い思いに、新宿方面と代々木方面へ戻って行く。

早朝だとゆうのに、人々には容赦なく真夏の太陽が襲いかかり、滝のように流れる汗が線路を濡らす、すぐに蒸発して消える。

幸い、他の列車は停車しているようだ。

5

同日の午後七時半ごろ、真夏の太陽がようやく沈み切り、灼熱地獄から解放された人々に、わずかな安息の時間が訪れていた。

だが、炎暑が蒸し暑さに変わっただけで、不快感はより一層増している。

JR 樫和駅近くの十字路で、信号待ちをしていた人々に、大型トラックがノンストップで突っ込んだ。

死亡者が五名、重軽傷者が十数名という大惨事で、事故現場には千切れた手足や肉片が散乱し、その衝突の激しさを物語っていた。

地獄絵図と化したその凄まじい光景に、狂乱状態で泣き叫ぶ者、激しく嘔吐する者が続出した。

パトカーや救急車が次々に到着し、封鎖された現場では、警察官や救急隊員たちが、忙しなく走り回っている。

トラックはなんのためらいもなく、ある一点を目指して突っ込んだ、との目撃証言がある。

確かに、ブレーキの跡がない。

その証言から、殺人者は一人の若い女性をターゲットにしていたようだ。

「すんげえ美人だったよ。櫛和辺りじゃ、滅多に見かけねえな」

と、目撃者の男性が警察署で語った。

その女性はすんでのところでもトラックを交わすと、近くを通りかかったタクシーに飛び乗るようにして、姿を消したとのことだった。運転していた男はその場から逃走、目撃者の証言によると、少し離れて停まっていた黒い乗用車で逃げたとのことだが、その後の消息はわかっていない。

「こう、赤い野球帽を被っていたな。それによオ、色の濃いサングラスに、こんなデツカイマスクで顔を隠していた。だから、顔はまったく見えなかったな」

目撃者の中の四十代の男性が、身振り手振りを交えて説明した。

「そうだなア、身長は百七十くれえで、痩せていた。そうそう、猫背だった。えっ…、なぜかってゆくと、家の三男坊、高校生なんだけど、少し猫背だよ。いつも、もっと胸を張って、堂々と歩けって注意しているモンで、それで気がついたんだわ」

との証言が、目撃者の一人が、携帯電話のカメラで撮った、乗用車に乗り込む寸前の男の写真と一致していた。

翌日の早朝、中央高速の八王子ジャンクション近くで、黒い乗用車は発見されたが、盗難車でしかも犯人に繋がるものは、なにも残されていなかった。

警察は、その場から姿を消した女性に、名乗り出るようにとテレビや新聞で呼びかけたが、数日経ってもなんの音沙汰もなかった。

大勢の目撃者がいたわりには、犯人に繋がる情報が乏しかった。

ただ唯一、目撃者によって撮影された、運転していた男の映像だけが手掛かりだった。

その写真がマスコミに公開されると、

『あいつかも知れない』

『後姿が友達の某に似ている』

などの証言が数多寄せられたが、犯人逮捕に結びつくような有力情報はなかった。

第二章 戦士の寛ぎ

1

その年の夏は、梅雨明けが宣せられても、不安定な天候が続ぎ、多雨の所為で、ムシムシと毎日蒸し暑い日々が続いている。

八月上旬の或る晩、場所は蕎麦庵“昇山”……。

「おう、参った、参った。こう蒸しちゃ、身体にカビが生えちゃうわ」

「まっただ。俺は、カラツと暑いのは大歓迎だが、蒸し暑いのは駄目だ」

「そういえば、剛ちゃんこつはサウナも嫌いだったな」

「そうよ。だいたいサウナで汗を流して体調を保とうとゆうのは、安易で不自然だろうが。やっぱりよオ、運動してスカツとした汗を掻かねえとな。おっ、きたきた」

「生ビールと蕎麦味噌でございます。蕎麦の実を胡麻油で炒めて味噌に絡めました」

ビールの脇に小鉢に入った蕎麦味噌が置かれた。

「そうかい、いただきよ」

「どうぞ、お召し上がりください」

水滴の付いたジョッキになみなみと注がれた黄金の液体、滑らかで白いシルクのような泡、思わずゴクリと喉が鳴る。

黄金の液体から小便を連想する御方は、一度病院で診察を受けた方がいいだろう。

「よし、まずは乾杯だ」

ガチツとジョッキをぶつけると、ゲビツ、ゲビツ、ゲビツ……と、胃の府に一気に流し込んだ。

タンとジョッキを机において、

「プハーッ、うんめエーッ！」

と、二人は同時に声を発した。

「これ、これ。夏はやっぱビールだ。男は黙って、なんとかって
広告があつたな」

「三船敏郎だろう、佐々木さんも古いねえ」

「ははははっ…、それを知っている剛ちゃんも、相当なものだぜ」

「川村の壁に貼ってあらあな」

「おや、そうだったかい」

「あれ、佐々木さん、あれだけ通っていても気が付かねえかい。ほ
れ、壁の右隅……」

「裸のネエちゃんのポスターの方は覚えがある」

「おっ、まだ枯れてねえな」

「お客様、本日のお勧めと、こちらは御品書でございます」

「ん？ おっ、すまねえ、すまねえ。どれどれ……」

野田が差し出されたメニューに手を伸ばす。

「本日は三点盛りがお勧めでございます」

ニコニコと、親しみのある笑みを浮かべながら料理の説明をするが、
けして押し付けることはなく、あくまでも客の主体性に任せてくれ
る。

媚び過ぎず、事務的にも過ぎず、一定の距離と節度を保つてくれ
る。

野田は、若主人のそんな対応が気に入って、この店に通うように
なった。

2

偶然飛び込んだ店だったが、鰻の店“川村”とはまた一味違う、
居心地の良さが気に入っている。

「わかった。じゃあ、その三点盛りとこの間もらった、ええと……」

「鴨焼きでございます」

「そうそう、それとあれだ、あれ」

野田がじれったそうに身を擦ると、

「はい、板ワサと野菜天麩羅の盛り合わせでございますね」と透かさず答えが返ってくる。

その間がなんともいい。

「蕎麦は最後にもらおう。いいだろう佐々木さん？」

「おう、いいよ。それとこれももらってくれ」

「はい、お客様、揚げ蕎麦でございますね」

「うん、それぞれ。それとこれもな」

と言って、佐々木はビールジョッキを指差した。

「はい、畏まりました」

と丁寧な頭を下げて畳から降りると、奥の厨房に向かって“はい、い、ご新規二名様”と張りのある声を響かせた。

「どうだ、いい店だろう？」

「おう、掃除が行き届いていて気持ちがいいな」

「そうだろう。特別贅を凝らしているとゆうわけじゃねえが、スッキリして居心地がいいだろう」

「ああ、木の香が漂ってきそうだよ。それに、あの兄ちゃんにいの対応がいいやな」

「おう、さすが佐々木さんだ。俺もあの若主人の対応が気に入った」

「若旦那かい、どうりで……。しかし、こんなところに、こんないい店があったとは、いや迂闊だったな」

「はい、お待ちどうさまです」

と、空になったジョッキを片付け、テーブルの汚れを真っ白な台拭きで拭き取ってから、新しいジョッキを置き、

「これはサービスでございます。蕎麦粉のクレープ、とでも申しましようか。お召し上がりください」

「おう、すまねえ。へえ、蕎麦粉のクレープねえ……。どれ……。おう、なかなか乙だ。ほれ、剛ちゃん食ってみるよ」

「うまいだろう？ 俺はこの間ご馳走になったから、佐々木さんやってくれ」

「いいのか。悪りいな。じゃあ、遠慮なくもらうよ」

「おう。ところで若主人、酒はなにがあるかな？」

「日本酒でしたら、“萬寿”と“浦霞”がございませう。どちらも大吟醸でございます」

「大吟醸か、高そうだな」

「剛ちゃん、偶にはいいじゃねえか」

「うん、まあそうだが、俺は焼酎が飲みてえな」

「焼酎でしたら久米仙の珍しいのがございませう」

「沖繩の泡盛か」

「はい、十二年モノの古酒で“久米仙ホワイト”、アルコール度は、三十五度でございます」

「おっ、いいね、いいね。俺はロック、ダブルでもらおう」

「はい、畏まりました。こちらのお客様は？」

「俺か、そうだなあ……、先ずは萬寿といこうか」

「畏まりました。少々お待ちください」

3

『いらっしやいませ』

『四人ですけど、御座敷は空いてますかしら？』

『はい、お隣は二名……、男性のお客様ですが、よろしいですか？』

「おい、参ったね。俺たちは人畜無害だぜ」

と、佐々木が囁いた。

「まったく。なにかあっても、警察呼ぶ手間が省けらァ。まあ、安心して座ってくれ。はあはははっ……」

声を潜めて応じて、だが豪快に笑った。

「シッ！」

佐々木が口到人差し指を立てる。

「失礼します」

と言って、四人組が隣の席に上がり込んできた。

「あつ、どうぞ、どうぞ。私たちは人畜無害です」
多少の皮肉を込め、野田が応じた。

「ご、剛ちゃん」

佐々木が諭すように小さく言った。

「どうもすみません。大丈夫です、おっかない顔していますが、噛み付きませんから」

「まあ、ほほほっ……」

四人が声を揃えて笑った。それですっかり打ち解けた。と、その中の一人が、

「もしかして剛ちゃん！？ 野田、剛三くん？」

「おっ、えっ？」

名前を呼ばれ、野田は相手の顔をマジマジと見た。

「おっ、おおおお、おっ、マ、マドンナ？」

「まあ、田村さん、お知り合い？」

「たむら？」

「旧姓、森田です」

「だ、だろっ。森田、うんと、うんと……慶子、さん」

「正解です。覚えていてくれたのね」

「まあ……ねえ、ねえ、お二人はどうゆう関係？」

一人が口を挟んできた。

「ふふふふっ……昔の恋人よね？」

「そんな関係じゃないの。ただの同級生よ」

という言葉に、野田は内心ガツカリした。

「同級生って？」

「うん、中学校の……、懐かしいわア」

「な、何年振りに、なるかな？」

野田がシドロモドロで応じと、

「おい剛ちゃん、紹介しろよ」

と、佐々木が助け舟を出すと、

「剛ちゃんは止めてくれ、今までどおり剛でいいよ」

と、顔を赤らめて頭を掻いた。

4

「おっ、そうだな。こちら大先輩の、ささ……」

野田が言いかけると、

「佐々木次郎です」

と自己紹介をする。

「皆さん、美しい方ばかりで……なあ、剛ちゃん」

「う、うん」

「まあ、佐々木さん、お上手ですこと。ねえ皆さん、こうゆう男性にはお気をつけあそばせ。ほほほっ……」

「まあ、武藤さんたら、うふふふっ……」

「ええと、私は最年長で、六十二歳の武藤久子です。言われる前に、先に言っちゃいますけど」

とおどけて言い、キョロキョロと辺りを見回して、ペロリと舌を出した。

「とてもそうは見えません。なあ、剛ちゃん」

「あ、うん」

「ありがとうございます。はい、鈴木さんと安西さんも自己紹介をなさいな。年齢も言うのよ」

「はいはい、私は鈴木正子です。森田、じゃなくて、田村さんとは高校の同級生です」

「歳は？」

「五十八よ、文句ある」

「正子さん、鯖を読んではいけません。この間誕生日を迎えたでしよっ」

武藤が混ぜ返す。

「まあ、相変わらず敵しいわねえ。ええと、五十九歳と一ヶ月、と、十五日です」

「まあ、ほほほっ……」

四人は声を揃えて笑った。

「はい、良子の番よ」

「ええ、私は安西良子といます」

はにかむように小さな声で囁いた。

「まあ、カマトトぶって」

「えっ、武藤さんたら……そんなこと、ありません」

消え入りそうな声で反論して、顔を真っ赤にした。

「良子は独身なのよ。お二人は？」

「また、そんなこと……」

「おっ、そいつは残念だ。俺にはおっかない母ちゃん子供が二人もいる。ほんで、羨ましいことに、こっちは独身だ。なあ、剛ちゃん」

と野田の方を顎でしゃくった。

「チツ……、ベラベラと余計なことを……」

「えっ、剛ちゃん、まだ独身なの？」

「はい、真正正銘の独身貴族です。もっとも、童貞かどうかはわかりませんがね」

「あら、渋い男なのに……。もしかして、バツが三つぐらいつくんじゃないかもしれませんこと。おほほほっ……」

「いえいえ、武藤さん。剛ちゃんには、バツは一つも付いちゃおりません。署長の私が保証します」

5

「えッ！ 消防署の方……？」

「あらっ……」

とずっつけて、

「警察署です。こんなことを隠しても、始まりませんからな。でも、飲んでいるときはただの中年男です。はあははははっ……」

「おい、“スケベな”が抜けているぞ」

「あつ、へっ…、ご、剛ちゃん、誤解されるじゃねえかよオ。人畜無害のこの俺を捕まえてよオ」

「お待ちどう様でした」

「あつ、きたきた。さあ、乾杯しましょうよ。ほら、お二人も一緒に」

武藤の音頭に全員で乾杯した。

「ほほう、いい飲みっぷりだ。女にしておくのは勿体ねえな」

「ほらほら、そうゆう差別発言はいけませんよ」

「おつと、こいつは一本取られたな。ははははっ…、よし、今日は気分がいいから、俺の奢りだ」

「おいおい、大丈夫かよ？」

「あつ、そうか、ここは高かったな」

「お客様、そんなことはございません」

「兄ちゃん、いつも冷静だねえ。そんなこつちゃあ、人生面白くもなんともねえだろう」

「ほほほっ…、お客様、余計なお世話でございます」

と、にこやかに言っ、去って行った。

「ちげえね」

「まったく余計なことを、ベラベラと」

と野田が呟くと、このとおりとばかり佐々木は右手を顔の前に翳した。

「野田くんは　　大学へ行ったのよね。それで官僚になったって聞いたけど」

「えっ、　　大学う、天下の秀才じゃないのオ」

「そうよ。剛ちゃんはキャリア、警視正様だ。俺たちなんざ百人束ンなつても、足元にもおよばねえよ」

「まあ、警官って、署長さんが一番偉いとばかり思っていたわ」

「そうだとも。現場の警察官が一番偉い。官僚なんてえのは、クズばっかだ」

野田の顔がマジになっていた。

「……………」

一瞬の静寂。

「だ、そうだ。まあ、今日は楽しくやろうじゃないの」

「そうよそうよ。伸ちゃん！日本酒を持ってきてちょうだい」

「ん？あの兄ちゃん、ノブちゃんてゆうのか？」

「そうよ、こここの二代目。とっても真面目なのよ」

「真面目が一番だ。なあ、あっははは……………」

と豪快に笑うと、伸ちゃんに、

「他のお客様のご迷惑となりますので、あまりお騒ぎになりませんように」

と諭された。

野田と佐々木は、四人組に、

「カラオケボックスへ行きましょう」

と誘われたが、ほうほうの体で逃げ出した。

6

「ふうう、参った、参った。近頃の女性は強いや」

「まったくだ、ほん…………、おっと電話だ。剛ちゃん、ちょっと待ってくれ」

と言って、佐々木は携帯電話を耳に当てた。

『はい、そうだが…………、なにっ、樫和駅近くの交差点で大事故だ。』

…………ふんふん、よし、わかった、すぐにそっちへ向う』

「事故か？」

「ああ、交差点で信号待ちの人たちにトラックが突っ込んだらしい。死傷者がかなり出たようだ。悪リイが俺は行かなきゃならねえ」

「俺も行く。現場は樫和駅の近くか？」

「そうだ、東口商店街を抜けた十字路のそこだ。神社のある辺りだ
そうだ」

「花園神社か、ここからだ……電車の方が早いな」

野田が時計を見ながら言った。

「ああ、この時間帯は渋滞中だろう」

二人は、東部埜田線の利根川台駅に向って走った。

駅近くの水道で野田が頭から水をかぶると、佐々木も同じように蛇口に頭を差し出した。

そんな二人の脇を、乗降客たちが怪訝な表情を浮べてすり抜けて行く。

「はははっ……ただの酔っ払いだな、俺たちは」

「違えねえ。おっ、電車が来たようだ」

駅にして四つ、十二分で櫛和駅に到着した。

東口に出ると、すぐに現場がわかった。

「あっちだ」

と佐々木が野田を促す。

「しかし、今日はなんて日だ」

走りながら野田が佐々木に話しかける。

「まったく。朝っぱらの東京で、とんでもない事件が二つもあつたそうだな」

「ああ、凄惨なものだった。それで厄落としのつもりで、佐々木さんを一杯誘ったんだが……」

「二度あることは三度ある、ってことかい」

「どうやら、そうなっちまった」

交差点の周りには凄惨な数の野次馬が集っている。

「はい、ごめんよ、ごめんよ」

と、辺りに声を掛けながら、佐々木は、張り巡らされたテープを潜って、現場に近づいて行く。

野田もその後が続いた。

「おう、武田。ごくろつさん」

「あ、はい、佐々木署長。ごくろつさまです」

「よっ」

「あつ、野田さんも一緒にしたか」

「なんだつてえ、車が、信号待ちの人たちに突っ込んだんだった？」
交差点の角に立つ電柱に、頭を減り込ましたトラックを指差しながら、佐々木が訊いた。

その減り込み具合が、衝突の激しさを表している。

電柱は折れ、電線が垂れ下がっている。

「……今のところ、わかっているのはそれだけです」

武田が事故のあらましを、要領よく、二人に話して聞かせた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6626z/>

警視正、野田剛三の事件簿より 真実 下之巻 選ばれし者

2011年12月23日06時48分発行